

漢字2字熟語が漢語動名詞かどうかの判断に及ぼす語構成の影響

—非漢字系中上級学習者対象の調査の結果から—

桑原 陽子

要 旨

本研究は、非漢字系中上級日本語学習者が漢字2字熟語の意味推測をするときに、その難しさが漢字熟語の語構成によって異なるかどうかを調査したものである。漢字2字熟語の中でも特に漢語動名詞に焦点をあて、漢字2字熟語を単独で見たときにそれに「する」がつくと判断するかどうかについて、語構成のタイプの違いから検討した。結果からは、動詞性のある漢字を含まないものや、右側に名詞がくる「V+N」タイプのものが正答率が低いことが示された。

キーワード：漢語動名詞，非漢字系日本語学習者，意味推測，語構成

1. 目的

非漢字系日本語学習者の漢語動名詞の意味推測を困難にする要因について、桑原（2012）と桑原（2014）では、学習者へのインタビュー調査から、次の4つを抽出した。漢語動名詞とは、「着手」「洗車」のように「する」がついてサ変動詞になり得る漢字熟語のことである（小林，2004）。

- （1）熟語を構成する漢字が動詞性を持たない。
- （2）熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる。
- （3）既成の漢字熟語から派生して使われている漢字がある。
- （4）漢字熟語の語構成に関する誤った思い込みがある。

この（1）から（4）は、約120語の漢語動名詞について3名の非漢字系中上級学習者を対象に縦断的に意味推測調査を行い（2011年11月～12月）、その中でも正しい意味推測が難しい漢語動名詞40語について、別の3名の非漢字系中上級学習者を対象に追加調査（2014年8月）した結果から得られたものである。調査はすべて個別調査であり、意味推測課題が終わった後で、そのように意味推測した理由を各学習者に詳しくインタビューしている。（1）から（4）の結果からもわかるように、意味推測には、学習者が漢語動名詞の語構成をどのようにとらえているかが影響している。それは、漢語動名詞の意味を推測することは、熟語の構成要素どうしの関係をどうとらえるかそのものだからである。

学習者が漢語動名詞を構成する漢字とその語構成をどのようにとらえているのか、それは本来の語構成と一致するのがあるいは大きくずれるのか、そしてその傾向は語構成のタイプによって異なるのか。これらのことを詳細に分析しようとするならば、調査材料の漢語動名詞は各語構成のタイプから網羅的に選択する必要があるだろう。漢語動名詞の語構成は、「開店」のように構

成要素どうしが補足関係にある「V+N」や、「飛行」のように動詞の修飾関係である「V>V」などがあり、およそ10種類に分けられる。そのような語構成のタイプをすべて調査材料に選択した上で、桑原（2014）のような意味推測の調査を行えば、意味推測の誤りの種類や難しさが、語構成のタイプごとにまとめられる。それによって、学習者が漢語動名詞の語構成をどうとらえており、漢語動名詞の語構成についてどのような知識を持っているのかを明らかにできるはずである。

本研究は、上記のような語構成と意味推測の難しさとの関わりを明らかにするために、漢字熟語が動詞性を持っているかどうかの判断に語構成がどう影響しているのかについて調査する。具体的には、非漢字系中上級日本語学習者に対して漢字2字熟語を単独で見せ、それに「する」がつくかどうかを判断してもらう。この調査では、学習者がその熟語を動詞として使うことができると判断しているかどうか、すなわちその熟語の意味が動詞性を持つと判断しているかどうかを明確になる。桑原（2014）では、学習者が漢語動名詞の意味推測を大きく誤ったときには、多くの場合で、それに「する」がつくとはまったく予想できていなかった。本研究では、この点について多人数を対象にした質問紙による調査を行う。

調査に使用する漢字2字熟語は、語構成のタイプをすべて網羅した漢語動名詞273語と、漢語動名詞ではない漢字2字熟語147語の合計420語で、桑原（2012, 2014）よりも大幅に増やす。また、桑原（2012, 2014）同様に、漢字熟語を構成する個々の漢字は知っているが単語としての意味は知らない可能性が高いものを使用した。その結果、学習者は漢字熟語を構成する2つの漢字を組み合わせて単語としての意味を解釈することになり、その解釈には漢字熟語の語構成をどのようにとらえているかが反映されると予想される。本研究の結果からは、動詞性を持つと判断されにくい漢語動名詞と判断されやすい漢語動名詞が、各語構成のタイプごとに明らかになる。そのデータは、学習者の語構成の知識を明らかにするための意味推測調査で用いる調査材料選定に有用である。

2. 調査

2.1 被調査者

非漢字系中上級日本語学習者22名である。学習者の母語は、ドイツ語12名、英語4名、インドネシア語3名、クロアチア語1名、マレー語1名、ロシア語1名である。全員が在籍する大学の中級以上の日本語クラスで日本語を勉強しており、日本語能力の判断は授業担当者によるものである。

2.2 調査材料

漢語動名詞273語を含む漢字2字熟語420語である。漢語動名詞かどうかとその語構成のタイプの判断は張（2014）による。漢語動名詞273語は、張（2014）の各語構成のタイプに含まれる漢語動名詞の数に応じて、すべての語構成のタイプを網羅するように選択した。調査材料は、旧日本語能力試験1級あるいは級外の漢字熟語の中から、2級までの漢字で構成されているものを選んだ。また、漢語動名詞ではない漢字熟語147語は、桑原（2013）の漢字熟語の意味の透明性の調査の調査材料の中から選択した。これは、語の意味の透明性と「する」がつくか

どうかの判断との関わりを検討するためである。使用した漢語動名詞273語の語構成の内訳を表1に示す。表中に用いられている品詞性と構成要素間の関係を示す記号は次のとおりである¹⁾。

V：動態類，Vi：自動詞，Vt：他動詞，Vti：自他両用動詞，A：様相類，N：事物類，

s：接辞，M：副用類

補足関係（+），修飾関係（>），並列関係（・），動補関係（>>，<<）

表1 調査材料の漢語動名詞の語構成のタイプの内訳

語構成のタイプ		例	調査材料数	語構成のタイプ		例	調査材料数			
AV型	A>V	A>Vi	大病	5	VV型	Vti>Vt	反論	13		
		A>Vt	密約	8		Vi>Vti	優先	2		
		A>Vti	多発	4		Vti>Vi	流行	6		
		計		17		計		89		
	V<<A	Vi<<A	接近	1		V・V	Vt・Vt	着用	15	
		Vti<<A	減少	3			Vi・Vi	発着	6	
		A>>Vti	軽減	1			Vti・Vti	上下	7	
		計		5			Vt・Vi	談笑	1	
VN型	N+V	N+Vi	野宿	1			M>V	Vt・Vti	作動	3
		N+Vt	雑談	6				Vti・Vt	通報	3
		N+Vti	南下	6				Vi・Vti	疲労	4
		計		13				Vti・Vi	連係	1
	V+N	Vi+N	来日	5				計		40
		Vt+N	点火	14				その他	M>Vt	自白
		Vti+N	着手	17		M>Vi			日参	5
		計		36		M>Vti			自立	11
	N>V	N>Vi	外遊	4	計				31	
		N>Vt	外食	9	その他	As			特化	
		N>Vti	山積	3		sV	殺到			
		計		16		NN	他界			
計		16	計			18				
VV型	V>V	Vt>Vt	試食	15	データ外	家出	8			
		Vi>Vi	分乗	9		病欠				
		Vti>Vti	落下	15		白熱				
		Vt>Vi	助長	5	総計		273			
		Vi>Vt	会食	9						
		Vt>Vti	選出	15						

漢語動名詞を構成する漢字がどちらも動詞性を持つ「VV型」が最も多く、全体の約半数を占める。「データ外」とは、張（2014）で語構成が判断できないものとして除外されているもので、たとえば「白熱」のような訳語（white heat）に相当するものや、「空爆」「特注」のように省略を含むものなどである。

調査材料の漢字2字熟語は、A4サイズの用紙に30語ずつ図1のように記載された。図1は調査用紙の回答用紙例である。

		自信がない					自信がある				
1	清算	する	×	1	2	3	4	5			
2	出家	する	×	1	2	3	4	5			
3	報道	する	×	1	2	3	4	5			

図1 調査用紙の回答用紙例

2.3 調査方法

被調査者に調査用紙を1部ずつ渡し、制限時間は設けず自分のペースで回答してもらった。被調査者は、各漢字熟語に「する」がつくとしたら「する」を○で囲み、つかないと思ったら「×」を○で囲み、その判断に対する自信を5段階で評定した。また、漢字熟語を構成する漢字に知らないものがあつたら、それを○で囲んでもらった。調査終了後、インタビューが可能であった22名中6名の被調査者に対して、個別にフォローアップインタビューを行った。

3. 結果

被調査者22名のうち1名のデータは調査対象の420語中98語が無回答であったため除外し、21名のデータを分析対象とした。420語の漢字熟語のうち、正答数300語以上の13名を成績上位群（平均正答語数323語）、300語未満の8名を成績下位群（平均正答語数254語）として、漢字熟語それぞれについて、「する」がつくかどうかの正答率（被調査者中の正答者の割合）を算出した。上位群は、正答率90%以上の漢語動名詞が109語、80%以上が149語、正答率40%未満が25語、30%未満が10語であった。下位群は、正答率90%以上の漢語動名詞が17語、80%以上が47語で、正答率40%未満が89語、30%未満が51語であった。フォローアップインタビューを行った6名のうち、4名が成績上位群で2名が成績下位群であった。

語構成のタイプ別に正答率の違いを詳しく見るために、正答率が40%未満と80%以上の漢語動名詞を分析対象とし、語構成のタイプ別の数を表2に示す。また、上位群・下位群ともに正答率が40%未満の語の一覧を表3に示す。

表2 正答率80%以上と40%未満の漢語動名詞数の語構成による分類

語構成型		[AV型]		[VN型]			[VV型]		[その他]		[データ外]
下位分類 (総数)		A>V (17)	V<<A (5)	N+V (13)	V+N (36)	N>V (16)	V>V (89)	V・V (40)	M>V (31)	その他 (18)	
正答率 40% 未満	下位	3	1	7	19	6	15	10	14	10	4
	上位	2	0	4	3	3	1	3	2	5	2
正答率 80% 以上	下位	2	0	3	3	2	22	12	1	2	0
	上位	11	3	4	13	7	67	23	12	8	1

* 網掛けは、40%未満、80%以上が半数以上であるもの

表3 上位群・下位群ともに正答率40%未満の漢語動名詞 (％)

漢語動名詞	語構成	上位群 正答率	下位群 正答率	漢語動名詞	語構成	上位群 正答率	下位群 正答率
大病	AV (A>Vi)	15.4	37.5	報道	VV (Vt・Vt)	30.8	25.0
難航	AV (A>Vi)	30.8	25.0	上下	VV (Vti・Vti)	38.5	25.0
意図	VN (N+Vt)	38.5	12.5	敬遠	VV (Vt>Vti)	30.8	25.0
他言	VN (N+Vt)	38.5	37.5	私語	その他 (M>Vt)	23.1	12.5
的中	VN (N+Vti)	15.4	25.0	一礼	その他 (M>Vi)	38.5	25.0
南下	VN (N+Vti)	23.1	25.0	早世	その他 (A>N)	15.4	0.0
赤面	VN (Vt+N)	30.8	37.5	他界	その他 (N>N)	0.0	25.0
注力	VN (Vt+N)	30.8	25.0	物色	その他 (N>N)	7.7	25.0
減点	VN (Vti+N)	30.8	12.5	機能	その他 (N・N)	30.8	25.0
目測	VN (N>Vt)	30.8	12.5	前後	その他 (N・N)	7.7	25.0
山積	VN (N>Vti)	15.4	37.5	熱中	データ外	30.8	37.5
				白熱	データ外	15.4	25.0

3.1 漢語動名詞

表2から、下位群で正答率40%未満の語数が多いのは、[VN型]の「N+V」「V+N」と[その他]の下位分類の「その他」、そして[データ外]である。そのうち、「N+V」「その他」「データ外」は、上位群でも比較的正答率が低い。

まず、「その他」で正答率が低いものは、表3によれば、語構成が「N>N」の「他界」「物色」、 「N・N」の「機能」「前後」、 「A>N」の「早世」で、いずれも動詞「V」を含まない。これは、(1)の「熟語を構成する漢字が動詞性を持たない」にあてはまる。

次に、「N+V」で上位群・下位群ともに正答率が低かったのは、「意図」「他言」「的中」「南下」である。これらは右側の動詞「V」に当たる漢字「図」「言」「中」「下」について、動詞性を持つ漢字として解釈することが難しいことが考えられる。それぞれの漢字の意味の解釈については、フォローアップインタビューで、次のようなコメントがそれぞれ1名から得られている。

(5)「意図」の「図」は「ず」。地図の「図」。だから、意識の地図？

(6)「他言」は「他の言語」「他の言葉」で「言」はことばだと思う。

(7)「的中」の「中」は「なか」。

(8)「南下」は「南の下」。どういう意味かわからないけど。

確かに、「図」を「^{はか}図る」という動詞としてとらえるより「^ず図」としてとらえるほうが容易であろう。実際、「図」は訓読み「はかーる」よりも音読み「ず」「と」の使用頻度のほうが高く、音読みの使用頻度は全体の90%近くを占める(Tamaoka,2004)。「中」も同様である。「中」を「^{あた}中る」と読むのは常用漢字外の用法であり、目にする頻度は非常に低いはずである。これらの漢字熟語は、(1)の「熟語を構成する漢字が動詞性を持たない」ものとしてとらえられやすいと考えられる。ただし、「他言」については(9)のようなコメントがあった。

(9)「他言」は「他の言ったこと」だと思う。「言う」は動詞だが「他」がついているので名詞になると思った。

つまり、「言」を動詞としてとらえていても、「他」の影響で名詞と考えた可能性があるということである。(6)のように「言」を「ことば」と解釈したのも、左にある「他」の影響かもしれない。したがって「他言」については、次に述べる接辞的用法を連想させるものの1例である可能性もある。

「V+N」で上位群、下位群ともに特に正答率が低いのは、「赤面」「注力」「減点」である。これらは、右側の「N」にあたる漢字の用法に影響されている可能性が示唆される。たとえば、「注力」は、右側の「力」が「能力」「体力」といった名詞を連想させ、同じ構造の単語として意味を解釈しがちであることが、フォローアップインタビューで確認された。たとえば、(10)のようなコメントがあった。

(10)「力」が後にあると「〇〇の力」として使われる。たとえば「学力」「能力」「引力」などがある。

このコメントをした調査協力者も含めて6名中5名が「注力」には「する」が見つからないと答えており、その全員から類似したコメントが得られている。

「赤面」「減点」も同様で、「赤面」は「赤い面」,「減点」は「減った点」のように、右側の「面」「点」が左側の漢字に修飾される構造で解釈しやすいと推測される。加えて、下位群で正答率が低いのは「返品」「点火」「除名」「在室」「白状」「留年」などで、たとえば「返品」の「品」,「在室」の「室」,「留年」の「年」は、それぞれ「商品」「教室」「事務室」「来年」のような語を連想させる可能性が高く、フォローアップインタビューでもそれが確認された。たとえば、「留年」は、不正解だった3名全員(うち2名は上位群)が(11)のようなコメントをしている。

(11)「年」がついているから名詞だと思う。「今年」「来年」「製造年」のようにうしろが「年」のものは名詞だと思った。

これらの結果は、(2)の「熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる」に該当すると言えるだろう。桑原(2014)で、「手」が「～をする人」を示す接辞的用法を連想させたことによる誤推測の例として示された「着手」は、本研究の調査でも下位群の正答率は40%未満であった。

一方、漢語動名詞を構成する漢字がどちらも動詞である [VV 型] は、正答率が低いものが少ない。上位群では正答率80%以上が、「V>V」では7割以上、「V・V」でも半数以上を占める。上位群・下位群ともに正答率が100%なのは、「引用」「決定」「回転」「建立」「持参」「設定」「開発」「参加」「連行」で、いずれも動詞性を持つと判断されやすい漢字で構成されている。もちろん、これらの漢字熟語を調査以前に学習し知っていた可能性は否定できず、その点については今後の課題である。しかし、これらの語の判定に対する確信度は、「自信がない」ことを示す評定値1あるいは2が各語に数かずつある。このことを考えると、これらの語を全員が知っていた可能性は低いのではないだろうか。

ただし、[VV 型] の中でも正答率が低いものがある。「報道」「上下」「敬遠」の3つは上位群・下位群ともに正答率が40%未満で、「比例」は上位群のみで正答率が40%未満であった。調査終了後のインタビューから、「例」「道」「上」「下」は名詞として、「遠」は形容詞としてとらえられがちで、動詞としてとらえにくいことが確認された。この中でも特に「道」を動詞としてとらえることは、母語話者であってもほとんどないであろう。「報道」の語源としては「道」は動詞「道^いう」として用いられているが(『新漢語林』2004-2008)、現代の用法では用いられないものである。

3.2 漢語動名詞以外

漢語動名詞ではない漢字熟語で正答率が上位群・下位群ともに40%未満のものを表4に示す。

表4 漢語動名詞ではない漢字熟語で正答率が低いもの (%)

漢字熟語	上位群正答率	下位群正答率	漢字熟語	上位群正答率	下位群正答率
遠足	30.8	37.5	始発	7.7	0.0
感覚	30.8	0.0	集落	30.8	25.0

これに加えて、上位群のみで特に正答率が低かったのは、「暴言」(正答率7.7)、「寝言」(正答率15.4)、「抱負」(正答率15.4)、「酒乱」(正答率15.4)である。下位群のみで正答率が低かったのは、「外見」「肩書」「小食」「単発」「住宅」(正答率はすべて25.0)である。これらの右側の漢字は、「覚」「発」「落」「言」「負」「乱」「見」「書」「食」のように動詞性を持つものが多い。

3.3 語の意味の透明性 (transparency) との関わり

桑原 (2013) は、漢字2字熟語の意味の透明性について、日本人大学生を調査対象として数値化した。漢字熟語の意味の透明性とは、「熟語を構成する個々の漢字が熟語の意味とどの程度容易に結びつけられるか」を示す指標である。今回の調査で使用された漢字2字熟語と、桑原 (2013) の調査材料で共通している漢字2字熟語267語(漢語動名詞121語、非漢語動名詞147語)について、「する」がつくかどうかについての正答率と、意味の透明性の指標の間でピアソンの積立相関係数を算出した。その結果、漢字熟語全体では上位群の正答率と意味の透明性との間 ($r = .014$, n.s)、下位群の正答率と意味の透明性との間 ($r = -.077$, n.s) のいずれも有意ではなか

った。また、漢語動名詞121語と漢語動名詞ではない147語を分けて、それぞれと意味の透明性と
の相関を算出した場合も同様で、いずれも有意ではなかった。

このことから、非漢字系学習者が漢字熟語に「する」がつくかどうかを正しく判断できるかど
うかと、その語の透明性の高低の間には相関がないことが示された。

4. 考察

本研究の結果、語構成のタイプの中では[VN型]と[その他]の正答率が下位群で低いこと
が示された。正答率が低い語を詳しく見たところ、桑原(2014)の結果のうち、「(1)熟語を構
成する漢字が動詞性を持たない」と「(2)熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる」に
あてはまることがわかった。(1)については、[VV型](例:作動)の漢語動名詞の正答率が
上位群で高いことから、それがうかがえる。また、これは動詞性を持つ漢字が含まれていれば
「する」がつくと判断する傾向があるということであり、実際、漢語動名詞ではなくても動詞性
を持つ漢字を含んでいる場合は、『する』がつくと判断されていることがわかった。

一方、(2)は[VN型](例:赤面, 減点)の正答率が低いことと関わっている。[VN型]の
うち[V+N]の「N」にあたる漢字が「面」「点」「室」「力」のように他の名詞を連想させる漢
字の場合は、それに影響されて『する』はつかないと判断される傾向がある。では、どのよ
うな漢字が他の名詞を連想させるのだろうか。日本語教育学会(2005)によれば、漢字2字熟語
の構造のパターンの中では、「N>N」ⁱⁱ⁾(例:牛乳),「V>N」(例:造花),「A>N」(例:美人)
のような連体修飾関係のものが最も多い。そうであるならば、学習者がふだんにする漢字2字
熟語の中では、連体修飾構造の名詞が多く、右に名詞性を持つ漢字が来ればその漢字熟語は名詞
であるととらえられやすい可能性が考えられる。つまり、どのような漢字が右に来て、それが
名詞であれば漢語動名詞として解釈されにくいということになるのではないだろうか。

張(2014)によれば、漢語動名詞のVN型のうちVとNが補足関係にある「V+N」と「N+V」
では、「V+N」が91.9%、「N+V」が8.1%で圧倒的に「V+N」が多い。今回の調査の結果とあ
わせて考えても、右側にNが来る漢語動名詞については、非漢字系学習者に漢字学習指導をする
上で注意が必要であることが示唆される。この点は今後の課題であり、1つ1つの漢字熟語をど
のように意味推測をしたのかについて詳しくインタビューすることによって明らかにできると考
える。

最後に、語の意味の透明性の高低と「する」がつくかどうかの判断の正しさの間には、まった
く相関がなかった。桑原(2013)では、語構成が明確である漢字熟語は意味の透明性が高いこと
が示されている。しかし、意味の透明性の指標は日本語母語話者によるもので、漢字熟語の意味
を知った上での判断である。本研究のように漢字熟語の意味を知らない学習者の判断とは、ま
ったく性質の異なるものであることが明らかになったと言えるだろう。

本研究は科研費(22652049)の助成を受けたものである。

参考文献

- 桑原陽子（2012）「漢字2字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響—主要部の位置との関わりから—」『福井大学留学生センター紀要』7,1-10.
- 桑原陽子（2013）「漢字2字熟語の意味の透明性の調査」『福井大学留学生センター紀要』8,1-14.
- 桑原陽子（2014）「非漢字系日本語学習者による漢語動名詞の意味推測の困難点—「する」の有無が推測に及ぼす影響—」『福井大学国際交流センター紀要』創刊号, 1-12.
- 小林英樹（2004）『現代日本語漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 張志剛（2014）『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
- 日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育事典』大修館書店
- 野村雅昭（1999）「サ変動詞の構造」森田良行教授古希記念論文集刊行会（編）『日本語研究と日本語教育』1-23. 明治書院
- Tamaoka Katsuo (2004) The 4th Edition database for the 1,945 basic Japanese kanji
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ktamaoka/download/index.html> よりダウンロード

注

- i 張（2014）では、品詞性と構成要素間の関係を示す記号は野村（1999）によっている。ただし、「動補関係」は張（2014）独自のものである。張（2014）によれば、「動補関係」は「主体の動作または変化を表す動詞的要素と、主体の動作や変化に伴って客体または主体に生じる変化の結果を表す形容詞的要素で構成される」（p.40）とされ、修飾関係とは区別されている。
- ii 日本語教育学会（2005）では、連体修飾関係も「+」を使って「N+N」のように表記しているが、本論文では連体修飾関係は張（2014）にしたがってすべて「>」で示す。

The influence of the word structure of two-Kanji compounds on deciding the compounds that can be used as a verb construction with "SURU".

Yoko Kuwabara

The present study investigated the difficulties intermediate and advanced learners of Japanese from non-Kanji countries have when inferring the meaning of Kanji compounds. Specially, the study examines if such issues can arise and vary depending on the compound type. That is, verbal noun Kanji compounds were chosen and the subjects were asked to judge if the given compound can be used as a verb construction with "SURU". The results indicate that the correct answer rate for the compounds, which do not include verb and "V+N" type, was relatively low.

Keywords : Sino-Japanese verbal noun, Kanji-compound, Japanese learners from non-Kanji use country, meaning inference, word structure